

《連載》海事団体ファイル⑱

山縣記念財団、戦前の設立から 75 周年

江戸時代中期以降、辰馬家は灘西宮（兵庫県）から醸造酒を江戸に送るため樽廻船を多く擁し、復路には米や雑貨を積載して酒造業だけでなく海運業も広げた。1885年には辰馬回漕店を設立、さらには海上保険にも進出し、酒造・海運・保険が家業の3本柱となっていた。

その後1909年に設立された辰馬汽船から海運業に本格的に参画し、同社はのちの新日本汽船、山下新日本汽船、ナビックスラインとなり、1999年に商船三井と合併。また、1919年設立の辰馬海上火災保険は興亜火災海上保険、日本興亜損害保険を経て、現在の損害保険ジャパン日本興亜となっている。

山縣記念財団は1940年に当時の辰馬汽船の山縣勝見社長が松本一郎常務取締役と設立。将来の海運の発展をにらみ、海運業の近代化を図ることと、海運に関する学術的な取り組みが重要との認識から、学問と実務の統合的機関を設けることが設立の目的だった。今年が財団設立75周年に当たる。

山縣勝見氏は1950年1月に日本船主協会会長に就任。当時の海運には政治的に重要な問題が多く、同年の6月には総選挙で参議院議員にも当選した。戦後の外航海運復帰に奔走し、翌年9月に開催されたサンフランシスコ講和会議では通商や航海に関する差別的な取り扱いが撤廃され、日本の外航海運の復権が実現した。山縣氏はその後も海運業界で活躍し、商学博士にもなって多数の論文を発表している。

山縣記念財団は1940年の設立後すぐに海運統制や海法に関する研

究を大学教授に委嘱して発表。翌年に勃発した太平洋戦争の空襲で多くの文献を失ったが、戦後も多くの海運関係の文献を刊行し、海事研究図書出版援助なども行ってきた。また、機関誌として、海外

現地視察や海外誌の抄訳をベースにした『海外海事情報』を1964年から2000年まで発行。一方、『海事研究年報』は1943年に創刊したものの、第2号を戦火で失い、その後休刊に至っていたが、1965年に『海事交通研究』として改題・復刊し、昨年11月発行の第63集まで続いている。

戦後いち早く海事に関する懇談会や講演会を開催して幅を広げ、その活動の一端は複数の海事関連団体の設立にも寄与した。また、1949年に新日本汽船の社員寮として使われていた神戸市北野町の「風見鶏の館」に研究室を設け、海事関連蔵書を充実。蔵書は2011年に海事図書館等に寄贈された。財団設立趣旨の1つである「海運に関する学術的取り組み」を充実させるため、海事研究者の育成・支援を続けており、学会との関係を維持。財団の研究員を経て大学教授や助教授に就任した研究者の数は20人近くに上る。

2012年4月に一般財団法人として新たにスタートし、現在は3事業（海事普及・啓蒙事業、表彰事業、支援事業）を中心に活動を展開している。

（1）海事普及・啓蒙事業として発行している学術研究誌『海事



小林一夫理事長（中央）、郷古達也常務理事（右）、堀井宣幸理事（左）

交通研究』（年刊）は、第63集（2014年）から自由論題のほかに指定テーマを設け、初回のテーマを「北極海航路」とした。次号（第64集）は「災害時の船舶利用」と「海事産業における女性の活躍推進」を指定テーマとし、3月末まで募集中。また、近年は山縣記念財団と海運の歴史について記した『海、船、そして海運』（田村茂編著）や「海」の業界で働いた人たちによるエッセイ集『海想』、さらには『海運70年史』（山岸寛著）などの海事関連図書を発行している。

（2）表彰事業として、2008年には創設者の名前を冠した『山縣勝見賞』を創設し、海事分野をテーマとする図書や論文、業績の中から優れたものに対して、毎年7月の「海の日」前後に贈呈式を行っている。

（3）支援・助成事業として、海事分野の調査研究、発展に貢献する事業を支援。日本海洋少年団連盟が主催する『褒状山縣賞』と『我ら海の子展』も後援している。今後は研究テーマが海運から総合物流やロジスティクスに拡大していることや、若い世代の“海・船離れ”の傾向などを踏まえた海事交通文化の普及活動を図っていく考えだ。